

[講演要旨]

1939年男鹿地震と1955年二ツ井地震—地震体験者へのヒアリング調査

林信太郎*(秋田大学)・渡部公成(男鹿市役所)・吉成洸人(コモディイイダ)

§1. はじめに

1939年男鹿地震と1955年二ツ井地震という秋田県で発生した二つの被害地震について、地震時および地震後の人々の行動を知るために、ヒアリング調査を行った。

男鹿地震については、2012年時点で地震発生から73年が経過していたため、地震体験を記録に残すほぼ最後のチャンスだった。

また、二ツ井地震は直下型地震で揺れも激しかったわりには認知度が低い。地元高校生への本地震に対するアンケート調査では、認知度は10%以下であり、世代間で地震体験の伝達があまり行われていない状況があった。このため地震体験を収集し、防災教育に生かすためにヒアリングを行った。

§2. 二つの地震の概要

男鹿地震は1939年5月1日14時58分に秋田県男鹿半島北方の海域を震源として発生したマグニチュード6.8の地震である。日本被害地震総覧(宇佐美, 2003)によれば、死者27名、負傷者52名、全潰家屋479棟、半潰家屋858棟の被害が発生した。また、水田・鏡味(2010)は新聞記事等の詳細な調査を行い、秋田県全域の被害状況を明らかにしたが、秋田市や能代市でも全潰家屋が発生している。また、地すべりなどの土砂災害が男鹿市船川や五里合などで発生している。

二ツ井地震は、秋田県北部の二ツ井町(現在は能代市二ツ井)で1955年10月19日10時45分に発生した内陸地震である。地震の震源は同町の七座山付近(島・柴野, 1956)、震源は浅いと推定されている。マグニチュードは5.9、最大震度は5強である。被害の程度は男鹿地震よりも軽微であり、重傷、軽傷を合わせて人的被害は4名である。木造家屋は半壊が3軒、傾斜が81軒となっている。非住家では、全壊が1棟、半壊が310棟となっている。最大の被害は当時建設中の響橋であり、トラスが落下し、工事は放棄された。このほかに鉄道関係で地盤沈下などによる被害が発生している。また、七座山では崖崩れが発生している。

§3. ヒアリングの方法

両地震体験者へのヒアリングは2012年に行った。店長の許可を得た上で、地元のスーパーマーケットの中で行った。買い物に来た地域の高齢者のうち地震を体験した可能性のある方に声をかけ、地震体験者でありかつ許可の出た場合にヒアリングを行った。

ヒアリングの内容は、現在の年齢、地震当時の状況、当時の地震についての知識などである。

男鹿地震については、50名以上の高齢者に声をかけたが、ヒアリングができた地震体験者は、76歳から90歳までの12名だった。地震当時の年齢は3歳から17歳である。70台後半の方は、地震当時、幼児であり、地震時の詳しい状況は記憶していない。また、85歳を超えた高齢者からのヒアリングは困難であった。したがって、証言の多くは10歳以下の児童の地震体験である。

二ツ井地震については、63歳から90歳までの17名に対してヒアリングを行うことができた。地震当時の年齢は6歳から31歳である。内9名が地震当時すでに成人しており、幅広い世代から詳しい状況を聞くことができた。

§4. ヒアリングの結果

男鹿地震:地震発生時には、山へ逃げたという証言と浜へ避難したという証言の両方が得られている。また、地割れを警戒して、堆肥場に板を載せそこに避難したり、竹林に避難する家族が多かった。避難期間は2~3日である。

地震前に学校での防災訓練が行われたことはなく、空襲時の避難訓練だけが行われていた。防災教育も行われていなかったためか、当時の男鹿半島中央部の住民の地震時の避難に関する認識は人により異なっていた。「津波がきたら山へ逃げろ」と認識していた人もいれば、「地震が発生したら海に逃げろ」と思っていた人もいた。また、最も記憶されているのが、「竹林に逃げろ」「地震が発生したら堆肥場へにげろ」という教訓である。このほかの避難先としては、学校、橋などがあげられる。竹林によっては100人規模の避難者があつまり、自炊生活を行った。隣近所との結びつきは現在の男鹿市よりもはるかに強く、また、公助が期待できなかったため、避難生活は共助の雰囲気で行われた。

二ツ井地震:地震発生時、屋内では机やテーブルの下に隠れる、屋外ではうずくまるなどの反応をした住民が多い。地震の揺れに恐怖を感じたり驚いたりしたという証言が多い。揺れがおさまってからは(揺れの間も)ほとんどの方はとりあえず外に出た。小学校でもグラウンドに避難している。その夜は、外で過ごした人が多い。屋内で過ごした場合でも玄関近くの部屋に家族全員が寝るなど、余震発生時にはすぐ家から飛び出せるような工夫をして夜を過ごしている。